

共棲み

二三回生 佐怒賀 弘子

(片山)

編集部 最近、千里山に六十七年間住んで居られたお母様をご自宅に迎えられました。九十六歳になられますが、お元気で千里山会の様子を毎回とっても喜んで聞き、また千里山会誌を読んでおられるそうです

ぎちぎちとははの踏み入るしもつきよわれとの共棲みふるさと捨てて

幼なわれこぼれむとするに掬いくれしははに差しのぶ吾の小さき手を

風呂敷にははの感傷を包み入れふうわりわが家に軟着陸す

ははそはの在るいのちこそ九十五年「想定外よ」とホッホと笑まう

スクと伸ぶバオバブ^{*}の木にあくがるる母との問答かみ合わせぬ日々

灯を消して母と吾とはたちまちに孤^{ひとり}の袋におのれを納^{しま}う

母の折る琉金・出目金まるまると極彩色にて机におよぐ

真夜われのそつと確かむ母のこと熟睡している胸に指組み

*バオバブとは、アフリカやマダガスカルに生育する大木。セネガルの言葉で「千年の木」の意味。寿命は名前のおりと言われ、幹の太さは10米を越すものもある世界最大級の木である。新芽は食用に、果実は食用・薬用・石鹸にもなる。高木になったときの樹形は逆さ徳利のようで超特徴的。アフリカの昔話では、「宝の木」として登場し、またサン・テクジュベリの「星の王様」で3本の木と星との挿絵が有名です。